

# 使い捨て食品容器の再資源化に着目 大学発の一般社団法人を設立 叡啓大学

叡啓大学（広島市）は3月5日、大学発の新規事業として、「一般社団法人サーキュラー・ラボ・広島」を設立した。

この法人は、地域の事業者と学生が連携しながら、主に使い捨て食品容器の再資源化を軸とした事業を展開するもの。同大の産学官連携・研究推進センターに所属する定金基教授が理事となり、食品容器の企画・製造・販売を行う株式会社シングィ（本社・同）と共同で立ち上げられた。設立のきっかけは、同大で行われている「共創プログラム」の取り組みだ。

共創プログラムとは、学生・企業・地域が協働し、社会課題の解決や新規事業の創出を目指す活動で、令和5年10月から

産学官連携・研究推進センターを中心に展開されている。令和7年度上半期に行われたプロジェクトでは、学生が主体となって企業や現場に直接訪問し、「使い捨て食品容器のリサイクルが社会に定着しないのはなぜか」といった社会問題について調査した。

その結果、紙コップは再生可能な紙資源であるにも関わらず、回収や分別、運搬などのコストや運用負担が特定の事業者に集中し、資源循環の仕組みが広く定着しにくいことが明らかになったのだという。また、事業者同士の連携の難しさから、一時的な取り組みにとどまりやすいという課題も判明した。

大学と学生が事業者間を仲介

し、調整を図る橋渡し役として機能するかどうかという観点から、さらなる調査を実施。フィールドワークを重ねることで、学生が特定の事業者に代わって調整役を担うことは可能であり、これに特化した法人の存在が不可欠であることを明らかにし、一般社団法人サーキュラー・ラボ・広島の設立に踏み切った。

法人としては今後、叡啓大の学生とシングィ社が築いてきた強固な共創体制を基盤に事業を推進していく。使い捨て食品容器の中でも、特に紙コップの廃棄を前提とする従来の仕組みを回収・再生・再利用へと転換し、回収事業者や飲食店、メーカーなど多様な関係者と連携しながら、地域内で循環させるという持続可能な資源循環サイクルを確立する構想だ。

さらに、学生が主体となってコンテンツの作成を行い、紙コップを「持続可能な社会へのメッセージを発信する媒体」として活用することで、資源循環と



企業と協働し法人設立に取り組んだ学生

経済性を両立する新たな社会実装モデル形成を目指す。

活動の一環として、昨年11月30日に行われた「第34回広島ベイマラソン大会」に協力した。参加者が使用した紙コップ約48キロ・㌦を学生が力を合わせて回収し、焼却処分による二酸化炭素排出量を約39.8キロ・㌦削減することができた。

また、3月にはジアウトレット広島（広島市）で約30万個の紙コップを対象とした本格実証も実施した。今後は、実証結果を踏まえた正式サービス化を予定している。広島から全国へと広がる展望に注目したい。